

のりの巡回診察

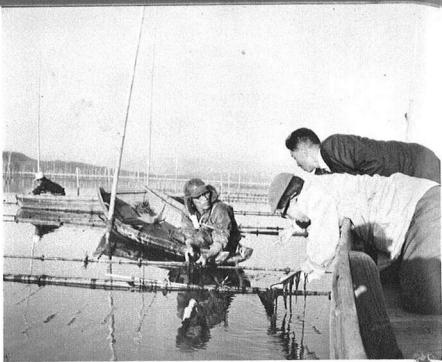
Fさんの担当する鏡地区は、以前、水産試験場鏡分場が置かれ、特にのり養殖を重点的に研究していたことでもわかるとおり、熊本県への養殖の大先進地であり、漁業協同組合も、殆どこの業者。当然、Fさんの仕事は、のりがすべてということになる。

のりの最盛期を迎えて、Fさんは連日の研究所、漁協のり漁場、あるいは入札の共販所と忙しい。

今日は、のり研究所から巡回班が廻ってくるのにならぬ。のりの大敵赤腐れ病の顕微鏡検査である。昨年度被害をこうむったため、今年度は徹底的に発病予知に努めようとするもの。

のりの研の技術員は、早朝から、郡浦をふり出しに、不知火、豊川、鏡、文政、八代と、不知火海の海岸線を一気に検査して廻る。赤腐れ病発生速度が急速なものであり、予診は、一刻も早い時期に、そして、同一条件下で行う必要があるからだ。

役場水産課、漁協それに普及員のFさんたちは、早朝から手わけして顕微鏡



右・豊作で生産者の顔も明るい



上・赤腐れ病の顕微鏡検査、今年は大丈夫のようだ。下・共販所での入札に立会う、最後まで気がかり。

査用サンプルののりを採集に廻った。鏡地区の沖合八ヶ池、六ヶ池、鏡川の中川地点、そのほか漁場西部で実験中の沖口網ヒビの四カ所から採取してきた。検査の結果、不知火海区域は、まず赤腐れの心配はなさそうであった。

科学的漁法に

点々とのりつみの舟が出ている。午後の日ざしは残っているが、ヒビの間を行く小舟の上は、海風が冷たい。だが、近寄って、でき具合を聞くFさんの顔は、のりを待つ主人の顔も明るい。いふならば、豊年方作というところ。

しかし、のりは、どちらかといえば、お天気相手の不安定な仕事だ。豊かな取獲を得るためには、関係者の懸命な努力が払われている。

「のりの漁、不漁で、のり養殖者の顔色までもがわかってきますよ」とFさんはいう。それを安定した産業とさせるための試み——科学に裏打ちされた新しい技術の指導、普及それに生活指導から流通指導まで、普及員に課せられた仕事も容易ではない。

かつて、不知火海の潮流検査が行なわ

沿岸漁業の最先端で

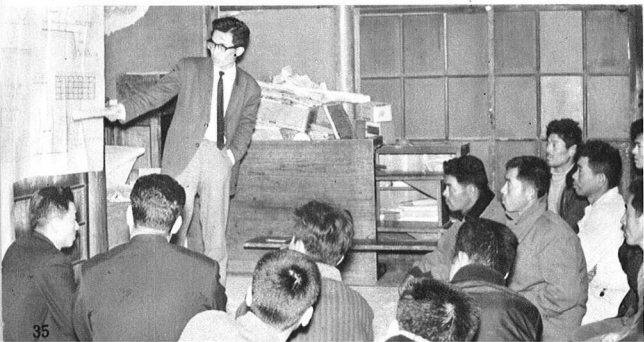
水産試験場各分場の大半が、試験場とのり研究所に統合され、研究体制が強化された。

一方、直接漁民の中に飛び込んで現場の技術指導、研究を行なうと「沿岸漁業改良普及員」が置かれたのが昭和36年。

13名の普及員は、その地道な活動の中でそれぞれの地域の特性に応じた新しい漁業を開拓しつつある。



下・青年部の研究会、夜おそくまで熱っぽい話がはずむ。



れた。海水は、干満につれて流動はするが、テスト用のガラスビンは、松橋海岸と戸馳海岸との間を往復するだけであることが判った。つまり、大きなタライの水は殆んど入れ替わることがないのだ。このことは、長い時間たてば、のりの肥料分が次第に不足してくることを意味する。

期待できる若い層

Fさんが、いま期待をかけているのが、

漁協の青年部と婦人部である。青年部は一応、結成後七年。だが、本格的な活動を始めたのは三十八年から。いま、沖合にバタ流しの網ヒビの実験にとりかかっている。これは、ひしめきあっている現在の漁区を拡大すべく、未利用地開墾にあてて手を付けたわけで、沖合養殖のバイオエナジーの役割を果たすものと、成果が期待されているのだ。

婦人部の方は、のりのシーズンに入っただこの頃、ほとんど毎晩、どこかの郡浦で集會が持たれており、Fさんもお出陣する。製品段階では、女性の手にかかることが多いため、のりすき、結束などの技術講習、流通機械のせたまの価格差の問題などが話合われる。激しい市場競争の中で、選別、結束の良否がいかに価格に影響することか、良質ののりが混入した数枚のヤブレ、一枚の砂まじりの故に買ったかたれる。一必ずの入札に立ち合うFさん自身、いやというほど知っている。

そして、この一年間の講習の成果は、他地域の同、等級のものより一円高の価格差となつて、はやくもあらわれている。(W)

下・のりすき作業をのぞく...

